

TOEIC®テスト教科書の可能性

宮崎 充保

1. 2つのオントロジー

1.1 TOEIC®テストのオントロジー

TOEIC®テストは原則としてコミュニケーションスキルの4側面、すなわち、

時間性から 即時的スキル：聞く、話す
恣意的スキル：読む、書く

あるいは

使用面から インプットのためのスキル：聞く、読む
アウトプットのためのスキル：話す、書く

のうち、「聞く」と「読む」の2つの英語でのスキルをテストする規範参照テスト（norm-referenced test）である。一般的に“コミュニケーション”と言えば“会話”を指す慣わしがあるが、¹それは間違いであり、たとえば報告文を、「読む」のも「書く」のもオーディアンスを前提としたもので、コミュニケーションであることを忘れてはならない。自問自答、日記すら自己をオーディアンスとしたコミュニケーションである。

言語は音楽と同様にリニアな表現手段であり、本質的には時間性、つまり、時間の束縛から解放されるものではないが、ここで、わざわざ“恣意的スキル”と呼ぶのは、「読む」スキルと「書く」スキルはほとんどの場合、対面コミュニケーションではないために、コミュニケーションが成立するまでに、当事者がかかるだけの時間をかけても構わない性質を持つからである。さらに付け加えれば、上の4つのスキルがそれぞれ排他的に発達するものではないことが経験的に言える。したがって、TOEIC®テストはテストとしては必ずしも限界性が高いものであるとは言えない。基準参照テスト（criterion-referenced test）と比べれば、「話す」「書く」のスキルの点では評価の精度が下がると言う難点はある。したがって、English Testing Service®はTOEICテストの個人スコアの扱いはおそろしく慎重である。EST®が発行する*Can-do Guide*（1998）では以下のように述べている。

受験者が英語で行うことができる、またはできるであろうと思われる特定の行動や態度に関する情報は、スコアからは得られません。（中略）さらに、スコアは英語の運用能力という点では、異なったスコア域（略）に属する受験者を区別することもできません。

¹ 従来はそうした英語を「実用英語」と呼んでいた。差別的な苛立たしい呼ばれ方であった。なぜなら、言語は実用以外に何があるのだろうか。文学研究、言語学研究でも英語は実用されるのである。まさか、虚用、不要の対語ではないはずである。おそらく、アカデミズムとの対語であろう。であれば、アカデミズムとは何か？ 教養主義（大学）と実用主義（街の英会話学校）との対比意識の中で不用意に用いられていた言葉だと信じたい。言語はスキルを伴ったツールであるために、ツール磨きをやることは大学のすることではなかったのである。ツール磨きが一夜にしてできるものではなく、どの分野と変わりなく、気の遠くなるような時間をかけなければならないことは隠されていた。昨今は実用英語が認知された。大学の教育も実用英語教育でなくてはならないとされるようになった。基礎体力を養う点では自明のことである。

しかし「話す力」「書く力」を含めて、「読む力」「聞く力」「人とやりとりする力」とTOEICの関連性がここでは述べられている。TOEICテストは、規範参照テストではあるが十分に英語コミュニケーションの潜在能力については個人的な能力として測りうると言える。

基準参照テストを以って個人の英語コミュニケーション能力を測ろうとすれば、膨大な手間暇をかけなければならないことは明らかである。加えて、「話す」「書く」の評価の精度を決定するためには同じく膨大なデータを必要とする。TOEICも「話す」能力についてテストをしないわけではない。公開テスト (Secure Program) でスコア730点を超えれば、Language Proficiency Interview (LPI) を希望者は受験して5段階評価で「話す」能力を評価される制度がある。この5段階はきびしい評価基準を持っている。ネイティブすら到達不可能であろうという、教養あるネイティブの「話す」英語を評価値「5」とする。が、LPIとTOEICテストの相関性が高いことも立証されている。² TOEICテストに準拠したカリキュラムならTOEICテストそのものだけでも十分であろう。アウトプットに要するスキルは、TOEICテストをプレースメントテストとして用いれば、その後の手作りの (home made) 英語コミュニケーション教育のなかで工夫して実践することはできるはずである。現代社会が要求するだけのコミュニケーション能力を大学が養成することも大学および大学生の存在条件の一つであるかぎり、TOEICテストの存在は小さいものではない。

TOEICテストは、直接にテストしないスキルをも排除しない2つのアウトプットスキルを間接的にテストして総合的なコミュニケーション潜在能力を査定することができる以上、プレースメントテスト (ここでは「プレTOEICテスト」と呼ぶ) 以降に、手作りコミュニケーション教育を含むカリキュラムの有効性とアカウンタビリティを問う「ポストTOEICテスト」にも利用するだけの価値が十分にあると考えられる。2002年には、大学生のSPテストでの平均点が548点、IPテスト (Institutional Program: 団体テスト) での平均点が418点と言う統計が出ている。³ Proficiency Scaleで言えば、前者はCランク (470—730)、

日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。通常会話であれば、要点を理解し、応答にも支障はない。複雑な場面において的確な対応や意思疎通になると、巧拙の差が見られる。基本的な文法・構文は身につけており、表現力の不足はあっても、とにかく自己の意思を伝える語彙を備えている。

後者はDランク (220—470)、

通常会話で最低限のコミュニケーションができる。ゆっくり話してもらえば、繰り返しや言い換えをしてもらえば、簡単な会話は理解できる。身近な話題であれば応答も可能である。語彙・文法・構文ともに不十分なところは多いが、相手が Non-Native に特別な配慮

² Wilson, K. (1993). *Rating TOEIC Scores to Oral Proficiency Interview Ratings (TOEIC Research Summaries, Number 1)*. Princeton, New Jersey: Educational Testing Service.

³ IPテストは一定の時間を置いて (およそ5年と聞く) SPテストをリサイクルするものなので、時代の隔たりが仮にものを言うならその分だけの点差を差し引いて考える必要があるが、IPがSPと同じステータスで扱われているのは時代の隔たりは物を言わないことを立証するものであろう。そうした中で、130点もの差が両者の平均点にあるのは簡単に説明がつく。SPテストは受験者が自発的に受けるテストであること。IPテストは好悪、得手不得手を問わず団体がその団体に属するメンバーに半ば強制的に課すものである。130点はこの“自発的”と“強制的”の違いに現れる。

をしてくれる場合には、意思疎通をはかることができる。

に入っている。いずれにせよ、Bランク（730—860）での「どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている」に到るまでにはまだ多大な学習が残される。しかし、418点はDランクの上方に位置していて、英語でのコミュニケーション指向への土台は築かれたと判断しても大きな過ちはあるまい。ただし、経験的に言えることとして、600点までは受験者の学習意欲と学習量と質によっては300—600の間を上下すると言える。材料の与え方・使い方と“積み重ね”学習に依存するスコアである。⁴ 大学英語教育の中で、TOEICテスト（IPテスト）に準拠したカリキュラムを実践する場合、全体として何をどこまで目標として掲げるか・掲げうるかを「プレTOEICテスト——ポストTOEICテスト」のブックエンド的なセットが指し示してくれるはずである。ここにもTOEICテストの存在理由が認められる。

1.2 TOEICテスト教科書のオントロジー

以上、TOEICテストが持つ可能性を前提としたとき、受験後の（手作りのコミュニケーション）教育と学習も射程に入れながら、TOEICテスト受験のための予備教育に必要な教科書はありうるのだろうか？

この問題は2001年2月末の英語部会で筆者がTOEICテストのための教科書係に指名されてから、2002年3月末に実際にまがりなりにも上梓した教科書を執筆し始めるまで、筆者を悩ませた問題である。

教科書として成立するとして、成立するまでに解決しなければならない問題を整理すると、

- 1) “教科書として” TOEICテスト図書が“教室で”利用価値のあるものでなくてはならない——市販のTOEIC指南書の形を取るわけには行かない。既存の大学教科書としてのTOEICテスト教科書は、隔靴搔痒のふしがある。授業のメインになるものではなく、授業にヴァリエティーを生み出すために添え物としての性格が強いと考えられる。つまり、TOEICテストに専念する授業は画期的である。
- 2) TOEICテストは2時間で終わるテストであるが、決して“小さなテストではない”。コミュニケーションの4つのスキルを何らかの方法で駆使する・できる態勢を整えられるまで、TOEICは教室で教授されなければならない。
- 3) コミュニケーション実践が前提となる以上、問題解答の仕方だけでは“英語の授業として”成り立たない。TOEICテストは、コミュニケーション実践へ誘導するためのツールと考えるか、ハイスコア獲得のための受験勉強の対象と考えるかで、学習者には大きな意味の違いが出てくる。（単なる大学経営のためならば、後者に徹するのが楽である。しかし、再び受験英語への逆戻り現象が起こるだろう。）前者を“英語の授業”の正しいあり方だとすべきである。

⁴ TOEICスコアを上げるための学習時間について次のようなことが言われている。200点から300点へ上げるためには1点につき1時間、300点から400点へは1点につき1.5時間、400点から500点へは1点につき2時間、500点から600点へは2.5時間、700点から800点へは3.5時間、800点以上は4時間の英語学習が必要とされる。（Lewis: 2002）。NHKスペシャル『英語が会社にやってきた』では450点から700点へ到達するためには1000時間の学習時間が必要だと言う。1日1時間学習しても3年かかる時間である。日ごろの積み重ねと膨大な時間を必要とする。

- 4) 従来のように、和訳を通しての英語の授業では、TOEICテストには太刀打ちできない。教授法を劇的に変えるものでなくてはならない。しかし、担当者も学習者も“無理なく”適応するものでなくてはならない。滑らかでありながら、劇的変化を要請する性質を持つていなければならない。
- 5) 大きなテストを受験前、授業7コマ（2ヶ月弱）で俯瞰できても、指導者と学習者は何らかの形で英語教育・英語学習の意識を失わず、両者に“満足感”が得られなければならない。少なくとも欲求不満が残らないようにしなければならない。
- 6) TOEICテスト導入の成果として“ポジティブな成果”を得られるようなものでなくてはならない。すなわち、コミュニケーション実践のスタートラインに立てたという確証が得られたと評価されるものでなくてはならない

であった。問題だけが山積して解決へは向こうとしなかった。正直のところ、考えるだけ鬱陶しかつた。カリキュラム策定に参画してほぼ完成形があって実施決定を間近に控えているが、個人的には大学の授業ではコミュニケーション教育は望めないと、いまだ絶望を脱しきれないでいたこともある。もはや、なんらかの実践によってしか解決の糸口を模索する手はなかった。

2. 2つの教科書

2001年度前期にTOEICテストそのものに焦点を合わせた授業になる『TOEIC準備』（包括科目）と『TOEIC指導』（基礎科目）を抱き合わせて『TOEIC300準備・指導』と称し、TOEICテスト専一のパイロット授業を行った。パイロット授業はこの時期を措いて他にはなかった。英語部会副部長およびTOEIC教科書係として、TOEICテスト導入の全学合意をにらみながら事の可能性を当時の共通教育センター主事の植村氏と議論していた折、植村氏はもはや現場の授業で模索するしかないという提案をしてきた。⁵ 前期授業の始まる寸前のことで、二の足を踏んでいる暇はなかった。踏み外したら実践論も何もなく、翌年度はほとんど確実に新カリキュラムへ突入することになる。パイロット授業の詳細は、『山口大学共通教育「センターだより」』（2001年秋号）で報告しているのでここでは省略する。

パイロット授業を終えて、上で挙げた問題の解決の糸口を探るために一つの結論として得たのは、単純なことだった。それは、“既存の図書に頼らずに独自のものを開発するしかない”という「決意」である。

①教室で、TOEICテストへの対処の仕方とともに練習問題⁶に触れる。指導者はそれを指

⁵ 同時に、当時の英語部会長の岩部氏は共通教育センター長、現副学長の丸本氏と二人三脚で各学部を回りながら合意を取り付ける説明をしていた。難航する説得作業であった。難航したのは、カリキュラム設計では、全学に英語6単位を必須化してTOEIC400を卒業要件に入れるものであった。スコア400の可能性への懐疑が強く、さらにカリキュラム案は練り直されTOEIC400はバーを下げ300になっていた。それでも難航して、2000年度から続いていた（語学教官有志が非公式に開いてきた）「言語センターフォーラム」の5回目を開いて学生参加のもとにTOEICテストの有用性を訴えたのである。筆者はそこでパイロット授業で使ったTOEICテスト紹介のための「TOEIC10分の1ミニテスト」を参加者に受けてもらった。TOEICに関して確かだと言えるものは、パイロット授業の結果から得るものしかなかったのである。

⁶ TOEICテストそのものは非公開主義を取っているために、原則として練習問題となる入学試験などのように過去問題が存在しない。ただし、財団法人国際コミュニケーション協会TOEIC運営委員会が出している『公式ガイド&問題集』に3回分だけの過去問題集が公表されているだけである。SPテストは2004年5月23日に106回を実施することになるが、公開されない問題はそれだけ蓄積があることになる。また、英語産業はおそらくは問題リサーチのための受験者をテスト会場に大量に送り込んでテスト内容の動向を探り模擬問題を作成してきたであろう。その証拠に2002年には136万人(2002 Data & Analysis, IIBC)の国内受験者が何らかの形で模擬問題に触れる需要を満たすだけの受験参考書・指南書が供給されている。

導して、学習者はそれを学習する。TOEICテストに対する指導者・学習者の双方へ同時にマニュアルとしての機能を持つ、ということで、上の1)－3)の問題の解決へ接近できる。

②そのために教科書の編成を巨視的視点と微視的視点の両方からパック化する。これで、4)と5)への問題解決の糸口はできる。

③さらに、週1回90分の授業だけに頼るだけでは何の学習効果も期待できない。とりわけ、TOEICテストに臨むとき、最初のリスニングテストの100問45分に耐えられるだけの自習量を確保すべきである。これが、6)の問題解決に迫りはしないか。

これだけのものを統一教科書として準備することを考えた。アイデアは上々だと自負したものの、実際の開発現場の地獄のことは考えなかった。同時に、他人をこれに巻き込むことも考えなかった。打ち合わせや執筆、全体の統一に相当の時間を割くので、巻き込まれた人をも含めた負担増を考えると共同作業を求めることは躊躇された。一方、教科書が単著者であるために偏向するのを承知で“一つの方向性”を打ち出し、後日、軌道修正や改善への道を模索したほうが効果としては高いであろうと考えた。集約したノウハウを蓄積していれば、筆者の交代はやりやすい。交代はFDにつながる、という独断に似たものがあつた。

TOEICテストでもう一つ大きな問題は、一人の人間が問題のすべてを作成してはならないことである。TOEICテストでは日常生活のさまざまなシチュエーションを想定してコミュニケーションのあり方を問うことを問題にしている。したがって、一人だけが持つ文体では多様なシチュエーションが要求するレジスターには対応できない。テスト問題は大勢の人間がかかわって作問した多様な文体とレジスターを内在させた総体である必要がある。そこで筆者は、当時の丸本共通教育センター長の許しを得て、大学教科書商業出版社に依頼して、著作権契約をもった問題を提供してもらいかわりに、そこから山口大学専用の教科書として自家本を出してもらうことにした。練習問題の出自は、どの出版社の図書のものかは関係筋にはわかるが、それはどうでもよい。山口大学専用提供され使用した問題は、程度から言えば、中程度、およそ、400－730をターゲットとする問題であろうと見当が付けられる。

2.1 Comprehensive Preparation for the TOEIC® Test (『速習TOEIC®テストトータルトレーニング』)(2002－2003年度使用)

TOEICテスト教科書の単独開発を決意した筆者は、上に述べた問題を包摂したアプローチを企画書にまとめて、2001年9月中旬、大学教科書商業出版社成美堂へ打診に上京した。

2.1.1 企画書

「TOEIC準備」教科書作成企画書

9.9.2001 宮崎 充保

- ★ クォーター7コマ授業に合う「TOEIC準備」の教科書を作成する
- ★ 成美堂さんに材料を提供してもらいながら、山口大学で使える教科書として考える

1. 作成目的

TOEICテストで、入門としてスコア300点ないし400点をクリアできるために、出題形式とその扱い方、出題内容に慣れるコツを教授する

2. 作成理念

- ・ねらいは、Communicative Englishの習得のとっかかりを作り、それが、英語コミュニケーションに効果的に用いられるような意識と意欲を持たせる。そのために、TOEICは有効なツールになりうることを周知のものとさせる
- ・入学時に学習の高い初期値を入力して、自学自習を持続する習慣を作る。そのために、週1回90分だけの授業でTOEIC受験勉強を終わらせてはならない。クオターの途中か最後のTOEICテストで学習者（学生）が納得の行くようにするためには、教室（授業）外の自習をも充実させるだけの内容を持たなければならない
- ・教員も学生もこのような授業は初めてなので、それぞれ両者が使いやすいマニュアルとしての要素も含めておかなければならない

3. 内容のあり方

- ・問題にどう取り組むか、そのコツを説く（技術的なものとして対処する仕方）
- ・問題内容とその性質をわかりやすく説く（英語力にかかわる部分）
- ・授業での7コマの配分：1課ごとに原則（目標・目的）をはっきりさせる
- ・自習課題を明示する（1日1時間の集中、それを週5-6日要求する）

4. 内容の骨子

- ① テーマのPartを扱う課は、問題数はフルテストと同じにする
- ② どの課にも、残りのPartsの問題を少しずつつけて（問題の特徴別に扱う）、いつも全体性を見失わないようにする
- ③ 所要時間：テーマのPart(s) 60分、他のParts 20分、課題その他 10分
- ④ テーマのPart(s)は説明を施し、他のPartsは答えを示すだけでよい
- ⑤ どの課も平均すると8ページくらいの構成がよいのではないか。課題綴じは別としてテキスト全体で60ページくらいにする
- ⑥ 教員には各課の全解答と、リスニング問題のScriptと要点を別冊にして用意しておく

4. 1 1課～7課の配置——マニュアル的要素をはっきり出す

・はじめに・本書の使い方

・第1課：“TOEICとはなにか？”

“TOEICの全貌”：ミニテスト（15分位）で大まかなテストの全貌を伝える

- 1) TOEICの主旨・内容・社会的意味を知らせる
- 2) 各Partから数問ずつ出題してミニテストで、予備知識なしにTOEICのミニ版を経験する（サンプルあり）
 - ① ミニテストは入門レベル程度の問題でよい（初めから本格的な問題で脅かさない）
 - ② 問題番号は各Partの本式の番号を用いて、問題をピックアップしたことを知らせる
 - ③ Listening Sectionにおける“Directions”はいつも同じなのでその英語にしっかり慣れさせる。慣れれば試験本番では、“Directions”が与えられている時間を、問題の写真を見る、問題文を読むなどの先取り時間に善用する
 - ④ Part IVについては問題の区切れの指示を聞き取ることも大切なので、ミニ解答用紙（マークシート：Bubble Sheet）には必ず余分の1問分の回答欄を設ける
 - ⑤ また、Part IVの“Directions”では、どういう種類の「説明文」かが明示され、何番から何番までがそれに関する問題出題かを聞き逃さない

⑥ 答え合わせをやり、それを10-990のスケールに換算する (initial standingの確認)

・ **第2課：「聞き取ればわかる」**：Parts I & II (Part I 20問, Part II 30問)

1) Part I：「写真」にあることを注意深く観察 (写真全体とは限らない) した説明文の選択 (いちばん、手の掛からない問題：聞くことにだけ集中できる)

- ① 解が他の選択肢と比べて正誤が際だっている
- ② 消去法で決める
- ③ 紛らわしい発音で迷わせる

2) Part II：「会話」を成立させる要件を知る (答えの予想を推察する)

- ① 5 W 1 Hをはっきり聞き分ける：Yes/Noで答える質問か
- ② 質問文の時制 (現在・過去・未来) を聞き分ける
- ③ 何を答えればよいか、推察する
 - －そのままの受け答え
 - －筋道にあう含意を推量することで

・ **第3課：“5 W 1 Hをつかめばわかる——聞いて読んで”**：Parts III & IV (Part III 30問, Part IV 20問)

1) Part IIIは「対話」(主に男女による)の聞き取り (状況把握力を問う)

2) Part IVは「説明文」の聞き取り (情報収集力を問う)

- ① 聞き取りだけではなく、問題文その答えの選択肢の「読み」も含まれる
- ② 5W1Hに着目する
- ③ 問題文の読みを、まず、先取りする
- ④ Part IVの説明文のテーマは、「講義やビジネスについてのプレゼンテーション (案内・紹介)」「アナウンスメント」「記事」「天気予報・道路交通事情」「お知らせ」など。
- ⑤ Part IIIでは冒頭の1文、Part IVでは冒頭の1～2文を聞き逃さない。そこには「話題のテーマ」が必ず含まれている。後続の文はその具体的内容になる。とりわけPart IVの説明文では、冒頭のintroductionの後にはdetailed informationが続き、最後にはconclusionに相当する1文が出る。だいたい3部構成で成り立っていると考えればよい。

・ **第4課：模擬試験 Listening Section** 残りの時間は遅れた分の補足

・ **第5課：“語彙力・文法力は会話にも読解にも欠かせない”**：Parts V & VI (Part V 40問, Part VI 20問)

1) 語彙力は問題文中の語彙なら中学から90%以上、それに加えて出題問題には「ビジネス・経済」「通信・メディア・テクノロジー」「和製英語」「日常生活・日用品」「食物・料理・レストラン」「娯楽・スポーツ」「社会・社会問題」「旅行・乗物・観光」「医療・人間の体」「建物・店・公共施設」「教育・学校」「気候・動植物」のジャンルに亘る語彙が用いられる

2) 文法力は例外を問うような問題はでない、原則的な文法ルールと文の組み立てルールを問う。誤謬問題の文の組み立てに関する英文は結構複雑である

- ① ここのPartsは平均1問30秒以内で回答する
- ② Part Vの制限時間20分 Part VIの制限時間10分

・ **第6課：“情報収集・速読・推論の力を蓄えて”**：Part VII (Part VII 40問)

1) 速読を通した文学的文章ではなく「実用文」の読解力で適切な情報を取れるか (速読の練習が必要である)

2) 内容意図がくみ取れるか

3) 実用文は「伝言 (電話メッセージ)」「諸書式」「広告・案内」「記事」「グラフ・表」「手紙 (ビジネスレター・案内状・招待状)・e-mail」などで、決して長いものではない。

- ① Part VIIの制限時間35分
- ② どんなに遅くても5-10分の全体の見直し時間を取れる余裕がもてるようにこのPartを終

えること

・ **第7課：模擬試験 Reading Section**

- 1) ここになると、もうTOEICを受けたあとの結果待ちのクラス状態かも知れない
- 2) Reading Sectionの模擬試験は第6課のあとの宿題にしてもよい
- 3) 補足をする時間に使ってもよいし、遅れのcatch upに使ってもよい
- 4) VTRを見せる時間にしてもよい

・ **付録**：ジャンル別のTOEIC語彙集（500語程度？）できればtwo-, three-word verbs, イディオムも加える

4. 2 教科書に記載する自習課題

自習課題は「TOEIC準備」ではリスニングに重点を置いたがよい

- 1) TOEICは初めの45分間がリスニングなので、45分の緊張・集中を持続させること（＝地獄の長さ）が第一であり、そのために「1日1時間の集中、それを週5-6日」の訓練が必要である。また、少しでも、「アメリカ英語」のnative音に慣れれば、問題に真正面から取り組める
- 2) 大半の学生がリスニングの訓練は受けていないに等しい
- 3) カタカナ英語に慣れている学生がほとんどである
- 4) 1分150語という速度に慣れていない。地獄の速さに聞こえる
- 5) まず、リスニングが出来ればListening Sectionでいくらかでも点が取れたという意識になってReading Sectionに取り組める。反対に、45分の前半のセッションについて行けない学生は、リスニングの途中からあるいは後半75分のセッション（Reading）でテスト放棄・睡魔に襲われるという事態に見舞われることがある

4. 3 リスニングに関する課題の内容

- ・ Basic SentencesとPassagesを両方取り扱う
- ・ 1日に、Basic Sentences 10文（?7語程度の長さ）とPassage 1つ（100語程度、聴く時間が1分を上回らない）。5週間行うことが出来るとして

Basic Sentences 10文×6日×5週間＝300文
 Passages 1つ×6日×5週間＝30文章

- ・ 教科書の中で学習範囲を指定する。また、Basic Sentences, Passagesにある文法事項を指定範囲した課にNuggets of Grammar（仮題）として1ページくらい割いて載せる。（あるいは?）
- ・ Basic Sentences, Passagesに関しての課題は、

Basic Sentences 10文を聴いて真似する。また分かるまで聴いて書き取る
 書き取れない言葉は、カタカナないしはそれに近い綴りで表記してよい
 Passages 1つ、は聴いて、何の話題か、そしてその話題に関してどんなことが
 言われているかを訳ではなく、大まかに簡条書きで情報収集する

この2項についてレポートを翌週の授業の始めに提出してもらおう。それは、同時に出席をとることにもなる

- ・ これらのTranscriptionと和訳は翌週配布して、それが、教科書にうまく綴じ込められるように工夫する（付録にファイルを付ける）。Transcriptionには簡単な語彙やイデオムの解説を書き加える。（あるいは、）Nuggets of Grammarはここに載せてもよい。
- ・ Native speakers of EnglishによるBasic SentencesとPassagesの朗読のCDを教科書に付ける。（学生によってはどんどん先に進んでもよい）

5. 作業分担

5. 1 成美堂

- ・ Partごとの問題提供
- ・ ジャンル別のTOEICに頻出する「語彙」提供
- ・ 課題用の基本文 (Basic Sentences) 300文と100語程度の文章 (Passages) 30文章の提供 (あるいはCD)
- ・ 各課に出るListening問題の録音 (教師用にカセットテープないしはCD)
- ・ 各課に出るListening問題のScriptと訳文 (教師用別冊)
- ・ 課題のBasic SentencesとPassagesの録音 (付録のCD)

5. 2 宮崎

- ・ テキスト執筆
- ・ 課題の文・文章の和訳文解説 (語彙・文法・文の組立) 執筆 (サンプルあり)
- ・ (CDあるいは,) 基本文300文は、用いる材料、TOEIC関係図書などから拾うことができるか
- ・ (CDあるいは,) 基本文を中学の英語教科書および高校のオーラルコミュニケーションの教科書から選ぶ

5. 3 共同作業

- ・ 問題: 「特徴」に従ってさらに分類する
- ・ 語彙: 使った材料から索引として取り出し、それをジャンル別に分類してもよい

5. 4 連絡先

成美堂・田村栄一さん: 東京都千代田区神田小川町3-22

tel: 03-3291-2261 fax: 03-3293-5490

e-mail: seibido@_____

宮崎充保 (Miyazaki, Mitsuyasu) : 753-8514 山口市吉田1677-1 山口大学

tel/fax: 083-933-5584 e-mail: mmiy@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

6. 時間設定 (スケジュール)

これを受けた成美堂は画期的というより、おそらく出版社にとって2000冊以上の採用は業界では小さいものではないこともあり——この競争に乗りなかつた出版社の間で、出版社名と著者の名は有名になってしまった——この企画書どおりに自家本を出すことに同意した。2002年いっぱい脱稿することが要請された。成美堂からは日を置かずに、Basic Sentencesに必要な中学校、高等学校の教科書がすべて段ボール箱数個になって送られてきた。その中には、Passagesの候補となる成美堂独自の材料も入っていた。

2.1.2 効率・有効性・指導学習法の転換

この教科書で特色を出そうと考えたことは企画書にも謳っている通り、以下の4点である。

1. 学習者が問題の形式と内容に慣れる。
2. 指導者にも学習者にもマニュアルとして用いることができる。
3. TOEICテストの出題をパック化して7コマ (1クォーター) の授業に対応する。
4. 自習課題を提供して、授業外の学習を充実させる。

形式と内容: 形式について言えば、TOEICテストの7部門の問題構成は流れが合理的である。まず、Part Iで視覚の補助を得て聞き取りをして、⁷ 集中を促すウォームアップである。Part II

で聴覚理解だけに絞る問題を出して補助を取り除く。Part Iではテレビの視聴解力、Part IIではラジオの聴解力と考えてよい。聴力へ集中を誘い、Part IIIでは1つの話題の会話に集中して、1問の問題文と4択の解答を読み取らせる。コミュニケーションにおける情報収集の基本力を問う。Part IVに到って1つの話題に散らばる情報を検索収集、推論させる。耳は音源に、目は問題文と解答の選択肢に集中させ、速聴と速読を要求する。和訳の習慣を脱し切れていない受験者はPart IIIとIVでテストから脱落しかねない。Part IIIから始まった速読は、Part Vに入って語彙・文法を問う問題となり、それをもとにPart VIでは構文理解力を問う。最後のPart VIIでは語彙・文法・構文理解力を基礎体力にして速読による、再び情報検索と収集、推論へ収斂する。テスト全体を振り返って見るとコミュニケーションの基礎、すなわち、受信・発信の自然なやり方から始まり、コミュニケーションそのもの、すなわち、受信・発信を通して情報の検索と収集、推論を求める。そのようにしてTOEICテストは合理的な作業上の一貫した流れを持つ構成を採っている。

また、内容に関しては、文法項目がPart Iでは中学の文法に限られるが、高校で出る応用形も用いながら、語彙は初めから日常のさまざまなシチュエーションを言い表せるだけのものが用いられる。語彙はネイティブがやるとおり一生かけて成長させなければならないが、文法は日本の高校までに学ぶ基本的なところで十分である。したがって、英語の勉強は語彙の増大と基礎文法の復習、それにシチュエーションのもつレジスターの「聞き取り」と「読み取り」である。この3点を明確にして念頭に置いておけばTOEICテストの取り組み方も複雑ではない。が、おおむねのところ、英語に辟易して大学に来た学習者にはこの3点は複雑にからみあい、混沌を呈している。

マニュアル性：形式・内容に関してフローチャートと説明文でわざと重複して述べた後、練習問題へ入る。最後のミニテストは、全体の中にその課で扱うPartsを位置づける。

パック化：上で説明した、問題形式の提示の流れの合理性にタイトルをつけて、それを模擬テストを含めて7コマで対処する。

自習課題の提示：もっとも時間と精力を費やしたのが、この自習課題の部分である。これは次節で述べる。

2.1.3 自習課題の開発

自習課題では、おそらく高校までの英語の勉強ではやったことがない作業を課することになるので、学習者は正直に取り組む限り、いちばん戸惑い骨の折れるところであり、1日1時間では復習も含めれば足りないはずである。最大の目的は、英語の勉強法を抜本的に変えて「使う」側面を最前面に押し出し、かつ和訳の習慣を排除することであった。そのために、大学生生活の取りかかりの時期は英語漬けにすることを目論んだ。

目的を達成するために、目標としたのは、①根気力と集中力を養いながら学習の習慣を身に付けること ②目の前にスクリプトも何もないのにネイティブの自然だと感じる速さ、1分間に150語程度、の英語に耳だけでぶつかり、何とかぼんやりと分かるまで聞くのを繰り返して、少しでも自然な英語、つまり、外国語学習者用にしつらえられたstudio Englishではなく、ネイティブ自身が普通だと思っている擬似のstreet Englishに慣れることである。“耳に穴を空け

⁷ 実はこの視覚たるもの却って確実性を失わせる。目をつぶって描写文4文を聴くと4枚の全く異なる絵が脳裏に投影されるのだが、提示されている写真は見る者の目に恣意的なフォーカスを許すので、描写文は虚を突くことがしばしばある。

る”ことが目標であった。

そのために、3枚のCDと、課題提出そして回収ののち復習のために5冊の『分冊』と称した通算100ページほどのハンドアウトを用意した。CDの内容は企画書に書いたとおりである。ハンドアウトの内容は、①基本文の日本語と英語10文、時間にして1分 ②文章1つ、100語程度、時間にして長くて1分、とその大意（和訳文）と解説 ③基本文のfunctionalな内容を“Situational Tip”と称して文化背景を交えて述べた30コラム ④基本文のnotionalな内容を“Grammar in a Nutshell”と称して9項目に分けたTOEICテスト基本文法 それと教科書巻末に付けた⑤Next Week's Vocabularyである。まともに組み立てれば1日1時間の学習では足りない量である。

①**Basic Sentences**：中学校の教科書（1－3年生用）と高校のオーラルコミュニケーションの教科書を成美堂が手に入れた数十冊にすべて目を通して、その中から基本と思われる文を拾った。基本となる文は1文8語を基準にした。有用な表現を基本文として採用できそうな文例を中学、高校の教科書から拾い出して行くうちに大方の文例が1文8語程度から成り立っているのを発見したのである。いずれにせよ、無茶な長さではない。カード1枚1例に800例ほど拾い、それを分類して、難癖をつけてふるいにかけ300例に絞った。面白かったのは、同じ文があちこちの教科書に出るということであった。それはむしろ当然の現象である。絞って残った300例の多くを加工した。Functionalとする例が101例、これをさらに分類すると「出会い——あいさつ」から「病気の回復」へと人間の日常の営みが順序よく自然に並んでいった。Notionalとする例が299例、同じように、文例自身が伝統文法の配列に近い形で自然に並んでくれた。分類はこちらが要求するものではなく、例そのものが要求するようである。もっとも無意識のうちに文例はそのようになるように拾い選択したのであろう。

②**Passages**：成美堂の蓄えていたコミュニケーションのための大学教科書の中から30例拝借している。この配列は会話文と説明文を交互に並べている。話題の分散に気を配ったが、それ以上の深い思慮があったわけではない。長短、難易を超えて耳を慣れさせることに眼目を置いた。⁸

③**Situational Tip**：Functionalな基本文を背景に、Basic Sentencesとして扱わなかった表現の拡大、また、表現や場の文化的背景をときにはエッセーにしている。これは著者の英語と英語文化の体験をもとにしたものである。

④**Grammar in a Nutshell**：Notionalな基本文を背景に、TOEICテストで扱われるとおぼしき基本文法を概略している。文法のむずかしいところまでは踏み込んでいない。その必要もなかったが、著者自身が苦手とするところでもあった。

⑤**Next Week's Vocabulary**：教科書本体の巻末に、約1500語を教科書で扱う練習問題から拾いそれを教科書の課に出てくる順に並べている。配列は、ここを予習しておけば次の授業で扱う問題を語彙の側面から予習できる目的を持っていた。最初の予定では、既成のTOEICテスト頻出語彙集から上位頻出語600語を転載することになっていたが、著作権の問題が解決しなかったために急遽、手作りに代えたものである。

一言、コメントを付けさせていただく。普通、使用者が読まない、疎んじたいと思う箇所にごそ時間がかかり苦慮する。たとえば、教科書の「はじめに」がまともに読まれるだろうか。

⁸ 新訂版『サーキットトレーニング』では、内容的配列に配慮した。身近な日常的话题から社会事情、社会問題へと配列した。著者の欲張りが新版では新たに現れた。英語を通して何かを学び、そして英語を学ぶことを背後では求めている。

ここは校長先生の訓示（お話）みたいなところである。単語集の作成も、材料すべてに限なく目を通して、乞食根性丸出しで単語を拾い、分類し、それに意味を付け、必要な解説と例文を加えるのである。例文は拾い物でやると著作権侵害になる。筆者は辞書の編纂に関わったことがないが、辞書編纂の根本はこうしたことだろうと思われる。

2.1.4 『自習課題ノート』

2002年度（初年度）は、課題はレポート用紙に書いて提出することになっていた。しかし、これでは、①集めにくい ②返却をしても取りに来ない学習者がいる ③復習をチェックすることができない、そして何よりも④大切な勉強のカウンセリングがあまりできない、というさまざまな欠点が見えてきた。さらに、⑤課題の内容のヒントがあれば課題のやり方がわかり、作業の内容も深いものになると思われた。

こうしたことを改善し、自習課題の管理を強化するためには、特製ノートがあったほうがよい。レポート代に相当する価格でこのノートを購入し、書き込んだ課題はこのノート1冊に集約されることを考えた。このアイデアには同僚から必ずしも賛同を得られたわけではないが、実践してみることを優先した。

ノートは、初め6ページに6回分の「意見・感想・カウンセリング」のページがある。1日分の課題は見開き2ページ構成を採り、左側のページに基本文の聞き取りの書き込み（多くの場合、最初の1語を提示している）と注意事項および質問欄を置いた。右側のページには、その日の文章1つに関して「聞き取りのポイント」を数項目配して、そのポイントに則して行けば内容の簡条書き（一種のアウトライン）が何とか書けるようにした。また、このページには、その日のNext Week's Vocabularyから学習者が得た単語を10語、もっと工夫の余地ありと感じながら、単に意味とともに書く欄を設けた。このノートは2003年度に用いられた。

結果として、このノートの作成はよかったのではないと思われる。統一規格の欄に課題は書き込むようになっていたため、学習者の作業のようすがわかるようになったこと、「前週の復習」のチェック欄を設けたことにより、ハンドアウトを参照しながら復習が学習に位置づけられ、そのため返却したら必ず取りに来るようになった。ただし、担当者が回答するページができて、時間的な負担を増したことは事実である。

2.1.5 教授資料

いわゆる“赤本”である。ここには、①本課のねらい・本課で扱う内容・時間配分 ②指導上の留意点 ③問題文のスク립ト ④大意（和訳、長い文章のみ） ⑤若干の解説つきの解答 を集めた（100ページ程度）。リスニング問題のスク립トは執筆時間の関係上、出版社に打ち込んでもらった。

この教授資料は、学習者用にスク립トも解答もないので、複製して学習者に配布してもよいことにした。したがって、出版社は装丁をせずオリジナルの電子媒体の原稿をプリントアウトしてクリップで留めるだけであった。2002年度は、CD-Rにして指導者全員に配布した。2003年度は同じ装丁で配布しておき、後日、担当者全員に添付書類でメールによる配信をした。

著者にとって、この教授資料の作成がいちばん想像力のない、いやな仕事である。苦勞の割には報われる感じがしない。出版社にとっては使用者への“おまけ”である。

2.1.6 価格

単に、TOEICテストのための勉強だけをしていては、TOEICテストそのもののために力を蓄えることはできないとして、ややTOEICテスト問題とはかけ離れた自習課題を教科書に付けたために、大部の教科書になった。教科書本体+CD 3枚+『分冊』5冊（分冊を綴じるためのバインダーに貼り付けるシール付き）で、価格は3200円となった。『自習課題ノート』（68ページ）は別売として定価300円の、出版社にとっては（ほとんど儲けのない）商品となった。学習者の負担はしたがって、2002年度は3200円、2003年度は3500円である。

1クオーターのための教科書としては高すぎるという批判がある。その批判はよくわかる。自習教材を抜いたら価格は急低下する。しかし、それを抜いたら、どのようにして自習を奨励し管理することができるであろうか。また、週1回90分しかない授業だけでは、現行のカリキュラムの元来の設計であるTOEICスコア400が達成できるのであろうか。“耳に穴を空ける”ことを指導しない授業であれば必須スコア300でたくさんという論理のほうが勝利を得るはずである。だが、低価格を目指す努力をしていないのではない——出版社とのこの価格闘争は悩ましい問題であり、出版社もぎりぎりのところで制作していることだけは記しておきたい。

2.1.7 改訂2003年度版

2003年度用に『自習課題ノート』の作成と同時に初版の改訂を行った。使用者にはどこが改訂されたかほとんど分からないことだが、全体を細かく読み直して、レイアウトの抜本的な変更や修正にページ渡りがないようにして、手を入れられるだけ入れた。これには出版社は悲鳴を上げた。価格を上げさせないで修正を求めるのである。出版社は印刷所に対して、修正1カ所につきいくらという料金を支払わなければならない。印刷のための紙型を作り直さなければならないのである。⁹

著者としては、最終形は永遠にないものという信条があるために、版を重ねるごとに修正を入れるのが誠実だと思っているが、商業という媒体が入るとその信念も新訂版へとおく必要がある。直すに直せないという苦い思いを胸に納めて生きていかなければならない。

日本の商業出版社に頼らずとも、直接にETS[®]やTOEIC運営委員会と結託したり、TOEIC問題集を出している海外の出版社と直接提携すればいいのではないかという向きもある。しかし、いずれにしても不可能なことである。前者で不可能なのは、TOEICテストの非公開主義を取っているために問題を個人的にリリースしてもらえない可能性はゼロである。また、自前で『公式ガイド&問題集』を始めとするTOEIC関係図書を出版している限り、利益の衝突が起こる。後者に関しては個人レベルでは出版社との取り付け、著作権、版権などの交渉、手続きなど、商売のノウハウのない人間には掛けなくてよい時間がかかりすぎる。

2.2 (新訂版) *Circuit Training for the TOEIC[®] Test* (『TOEIC[®]テスト サーキットトレーニング』) (2004年度)

当初から自家本としての教科書の寿命は2年だと考えていた。それ以上用いると、上級生から下級生へのマイナスの遺産相続が起こり、最終的には「TOEIC準備」の総仕上げである6月のTOEIC IPの足を引っ張ることになる。学習者は授業や課題は形式的にこなすことができ

⁹ 『サーキットトレーニング』では、2年間は手を入れないという一冊を取られることになった。その分だけ執筆のとき緊張は高まり細心の注意を払わなければならなかった。

も、相続による解答引き写しが起こればテスト本番で馬脚を表し、本当に力をつけなかったツケが回ってくる。画期的なカリキュラムを発展させるのも壊すのもこの教科書開発にかかっている。教科書はたえず更新されなければならないのである。もっとも、ある程度の材料の蓄えをしたら、その再編成を行えばすむようになる。それに到るまでは、著者は宿命的な荷を背負うことになる。

*Comprehensive Preparation for the TOEIC® Test*を終えた時点から次の教科書開発のプロジェクトが始まっていた。

2.1.1 *Comprehensive Preparation for the TOEIC® Test* への批判と反省

この教科書の特徴は2.1.2で述べた。その中に「マニュアル的性格」と「パック化」があった。これが、担当者の“満足感”（1.2の問題5）を奪うことになったのである。「パック化」は配当時間を決めて一定量の教材をこなすことを担当者に「教授資料」の中で要請する。これが意味することは、余計なことを言ったりしたりせずに指定の作業をこなせ、ということにつながった。したがって、担当者の中にはCDプレーヤーを操作するだけ（教員は「CDプレーヤー操作係」というニックネームが生まれた）、練習問題の解答を伝えるだけという感覚が生まれた。これなら何も自分でなくてもよい。英語教員でなくてもよい。指導プログラムをインプットしたロボットを使えばすむことになる。

さらに、リスニング問題のナレーションが速すぎるのではないかという指摘を受けた。速いのに慣れておけば本番ではゆっくり聞こえるからよいのではという考えもあるが、慣れない学習者にはむしろ過酷と言ってよいだろう。しかし、1分150語レベル以下に落とすことはできない、studio Englishへ先祖がえりになる。財団法人国際コミュニケーション協会TOEIC運営委員会が出している『TOEIC®公式ガイド&問題集』に付いているCDの標準的なTOEICテストリスニングのナレーションと成美堂が提供した問題のナレーションを仔細に聞き比べると、リスニング問題全100問に対する朗読時間は後者（教科書採用分）が2分くらい速かった。それ以上に問題だったのは、TOEICテストが標準アメリカ英語で行われるのに対して、ここにあるナレーションの一部にはアジア語の訛りをごくわずかながら聞き取れた。¹⁰ また、ナレーション自体に時間には換算できないゆとりが欠けていた。比較しながらナレーションを聴いていて気ぜわしさを強く感じた。ナレーターに“速く”という貧相な語り意識が感じられる。ただでさえ、TOEICテストは“時は金なり”の合理主義から生まれたテストであるだけに、時間に換算できないゆとりは絶対に尊重しなければならない要素である。

もう一つ、学習者が復習できるように練習問題の音源を配布して欲しいという要望があった。高価な教科書を最大限に利用してもらうための正当な要望だったと言える。これに関しては、担当者用の練習問題CD-Rを複製して山口大学の3図書館に置いた。また、出版社の了解を得てwebexerciseでも限定公開した。

¹⁰ コミュニケーションは訛りの有無の問題レベルではない。意思伝達がなされれば訛りがあっても一向に構わないのである。早く言えば、コミュニケーションアプローチではinternational English (IE)と称して、英語圏の英語も英語の一つのラベルとしか考えない。したがって訛りのあることに何ら問題はない。英語圏ですら、地方の訛りをアナウンサーの中に許容している。この点では日本のNHKの標準日本語（NHKでしか使われない日本語、一種の架空の日本語）は特異な存在になっている。問題はそうしたことなく、TOEICテストが標準アメリカ英語を採用する限り、受験生はそれに慣れるしかない。筆者のイギリス人同僚は、美しいイギリス英語を話すのにもかわらず、TOEIC訓練録音教材を作成するのにアメリカ英語を採用しようとしている。

一人の著者による、いわば、一方向に“偏向した”教科書であるので、批判は当然であり、それは著者として真剣に受け止めなければならない。改善の道を模索するためには、我田引水ではあるが、単著の利点はそこにある。

著者としては、2年使用するうちにさらなるアイデアが膨らみ、授業と自習課題がなんらかの形で関連を持ちながら、学習者は円環的にTOEICテストの学習ができないかを考えた。また、1コマの授業にもう少しゆとりを持たせて、担当者と学習者の間にインターアクションを起こすことを考えた。これは、TOEICテストが小さなテストではないことを考えるとかなりの難問であった。つまり、どこを削って短縮しても意味ある時間の創出は筆者の頭では浮かばなかった。考えられることは、既存のものを解体することである。

2.2.2 新訂版の企画

以上の批判や要望を念頭に置いて、2003年度の7月から新訂版開発の作業に取りかかった。成美堂が契約しているTOEICテスト問題集は2巻からなっているので、この新訂版の練習問題にはまるまる1巻手元に残っていた。*Comprehensive Preparation for the TOEIC® Test* で用いた問題量は第1巻の模擬テスト3回分600問だったが、新訂版でも第2巻の同じ600問を使うことにしていた。

企画に関して、成美堂とは新訂版の企画はメールでやり取りをして、2003年9月に上京して出版社に出来上がった新訂版教科書本体の原稿の全貌を明らかにした。出版社とは教科書が古くなるので新版を出すことについては合意ができていた。以下に挙げるのは9月以前のメールの段階での企画である。

[メール添付書類]

2003.6.3

タイトル：*Comprehensive Training for the TOEIC® Test* (『TOEIC®テストトータルトレーニング』)

Lessonsの構成

・Today's Vocabulary Preview

その日に出る単語から10問を聞き取る（文中：文はその課で扱う練習問題から：予習であらかじめやっておく。教師用CDにも入れる）

Reduced Forms

(Pronunciationで扱うReduced Formsのメモ書き)

And/or

Need your-met your

Dark [I]

Do you, Does he [zhi:], Does she [zshi:]

Get her her ticket

・そのPartの概略

このパートについて

問題の流れ

問題形式への対処の要領

問題内容への対処の要領

- ・問題実践練習：学生と教師の問答形式（平均3問）
- ・その課の練習問題（学生用CDにも入れる）
- ・ミニテスト

本書の構成

- ・はじめに
- ・本書の使い方
- ・TOEICテストについて（自習の1/10ミニテストを含む：課題CDに録音：Answer Sheetの提出）
- ・Next Week's Vocabulary Preview（課とDayの指定をする）

- ・Lesson 1: 聞き取りのためのwarm-up-Part I
- ・Lesson 2: 聞き取りに集中する-Part II
- ・Lesson 3: 聞き取って・読み取って(1)：会話文-Part III
- ・Lesson 4: 聞き取って・読み取って(2)：説明文-Part IV
- ・Lesson 5: 単語力・文法力は会話力・読解力にも欠かせない(1)：文法・語彙問題-Part V
- ・Lesson 6: 単語力・文法力は会話力・読解力にも欠かせない(2)：誤謬訂正問題-Part VI
- ・Lesson 7: 速読での確な情報収集, 推察力：説明文問題-Part VII

- ・Practice Test（自習して提出：学生のCDに入れる）
- ・Answer Sheets

の600問を使用

課題CD: Basic Sentences 300文, Passages 30 pieces

作業工程（9月終わりに脱稿予定）

1. 問題分配	7月初旬
2. 単語収集－単語集	7月第1週－第2週
3. 教科書本文	7月第3週－月末
4. 課題文収集：Gleaning→配列	8月第1週－第2週
Passagesはいくつか, Thomson 1 と入れ替える	8月第3週－月末
5. 各週のハンドアウト作成	9月半ばまで
6. CDシナリオ作り	9月半ば－月末

さらに、7月のメールでは企画内容変更その他を提示している。

Date: Fri, 11 Jul 2003 17:11:50 +0900
 To: "seibido" <seibido@—————>
 From: mmiy@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp (Mitsuyasu Miyazaki)
 Subject: Re: 企画の件
 Cc:
 Bcc:
 X-Attachments: :Macintosh HD:108251:Distributions2004.xls:
 株式会社 成美堂
 田村 栄一 さま

.....

問題配分表をお送りします。これでだいたいの内容がおわかりいただけると思います。1課の構成は、

- ・ Vocabulary Check
- ・ Pronunciation
-
- ・ How to Deal with Questions along the Flow
-
- ・ Tips
- ・ Let's Try Together (例題)
-
- ・ Practice
-
- ・ Mini Test (先取りTipsをさりげなく入れる)
- ・ Homework

ですが、Vocabulary Listをどこに入れようかと思案中です。

Les.1 | Les. 2 | Les. 3 | Les. 4 | Les. 5-6 | Les. 7 | Mock Testの半分

を授業では7回クォーターで考えています。Part 7を試験の週にやることは得策ではありませんので、Lessonsからはみ出させるMock Testを最後の時間に半分授業で扱ってもらい、Preliminary Lessonで授業開始前に、TOEICについて・1/5テストをやって、第1回目のLesson 1に入ってもらおうと考えています。この方が、批判的な人たちにはゆとりがあって、自分を語ることができると思います。

.....

こうして新しい構成の、しかし、根本的なコンセプトは変わらない教科書の開発になった。この作業は筆者がさまざまな用務に追われて前回ほどの没頭集中が得られず、予定では前回の作業から割り出した作業工程9月脱稿から大幅に遅れて、脱稿したのは2004年の1月末ぎりぎりだった。この4ヶ月の遅れは何はさておき著者自身に集中が得られず、遅々として執筆の筆が進まなかったことが主たる原因である。校正、執筆とが同時進行になり、さらには12月半ばにスタジオ入りしたCDの録音(通算時間8時間分)と原稿の整合性をつけることにもなった。収録した時、編集氏と協議の上、4枚のCDに収めることにした。およそ半分の4時間半に編集しなおすことを意味する。すべての校正は3月12日のファックス通信を最後に責了とし、印刷へ回された。教科書本体の出来上がりは3月24日ごろの予定になった。この新訂版のFDは何とか3月中に実施できるようになった。

2.2.3 新訂版の目的・目標と編纂方針・内容

新訂版は、タイトルも変えて、*Circuit Training for the TOEIC® Test*として東京：成美堂から自家本として上梓された。話し合いでこの教科書は少なくとも2年間使用することになっているため、2005年度もこの教科書で「TOEIC準備」の授業はなされなければならない。また、担当者が新しい教科書に慣れるまでにはそれだけの時間と使用経験を要するであろう。

この教科書の目的・目標、編纂方針・内容は上に挙げた批判・要望を反映させているつもり

である。このことは新訂版に付随する「教授資料」に記している。それをここに引用する。

1. 本書の目的

- ▷ 本書を通して、受動的に内容を「わかる」英語から能動的に「使う」英語、すなわち言語コミュニケーションの手段としての英語教育のとは口をつける
- ▷ 高等学校までの限られたコミュニケーションシチュエーションから、TOEICテストに接することにより急速に広がる日常生活のレジスターをもったコミュニケーションシチュエーションで用いられる英語に転換する
- ▷ TOEICテスト受験のためのマニュアルとする——1) 受験技術の習熟 2) TOEICテストにある英語の学習

2. 本書を通して設定できる目標

以下にあげる可能な目標から複数の指導上可能な目標を選んで、第1回目の授業でシラバス（最低の認証評価のできる目標は記載されている）と共に説明する。

- ▷ TOEICテスト受験テクニックを身につける
- ▷ TOEICテストにある英語のスキルを身につけながら、高等学校までの英語学力の維持ないしは、それからの学力向上を図り、大学が提供する“大学らしい”英語教育（とりわけコミュニケーションに特化した）およびそれに備えるさまざまなプログラムに学習者を習熟度に応じて配置する準備をする——TOEICテストが習熟度別クラス編成のためのプレースメントテストとして十全に機能するように指導する
- ▷ 学習者は自習課題（必須）と指導者の設定する課題をこなすために、1日最低1時間、週6日、を5週間続けることによって就学の習慣と動機を付ける——必須課題は聞き取りと単語、決まり文句の学習を要求している（『自習課題ノート』および毎週、配布される『スクリプト集およびその解説』がある）
- ▷ 付録の教科書の練習問題音源が収録されたCDを用いて、余裕のある学生は予習・復習を行い、余裕のない学生は復習を行う（ように指導する）
- ▷ 学習者は1分間150語程度の発話スピードに慣れる
- ▷ 学習者はプレTOEICテストのために、少なくとも1,000語の単語を習得する——本書には約2,200語のTOEICテストに必要と思われる単語を収録しており、そのすべてが付録のCDに正確な音声で記録されている
- ▷ TOEICテストのための基本的な文法の習得あるいは復習をする——別冊として簡略文法解説書（*Grammar in a Nutshell*）がある
- ▷ TOEICテスト練習問題を通して、「速聴」「速読」に触れ情報検索と収集の仕方を学ぶ
- ▷ 同じく練習問題を通して、推論の仕方を学ぶと同時に即断力を身につける
- ▷ ポストテストとしてのTOEICテスト活用のために学習を維持させる
- ▷ 英語は文化無指向言語とはなっているが、TOEICテストの問題にはかなりのところで英語圏の文化を前提にするものがあり、そうしたことを通して文化理解にたいする関心を高める

1. 本書の編纂方針

▷ 個々の指導者の裁量の枠を増大

担当者なりの独自の創意工夫に入れられる余地を作った。バックにした投げ渡しの教科書では、担当者の教育的創造性がそこなわれるという批判に答えてのことである。（cf. Gertrude Moskowitz (1978); Daniel Keyes, *Flowers for Algernon*: “...intelligence and education which hasn't been tempered by human affection isn't worth a damn.”）統一シラバスを用いるが、各課の週配分と各課にある授業で扱うセクションや問題量は担当者の判断による裁量に任せられ

るようにした。以下に各課の構成を示すが、必要と思われるところを授業では扱い、残りは課題にしてもよい。ただし、シラバスの基本ラインからの逸脱は学生に不公平になるので厳重に避けていただきたい。各課の週配分は担当者自身が決めて、第1回目の授業のときにプリント配布により学生に明確に伝達していただきたい。

▷ **PARTごとに問題例題**

ここでは、担当者が自己のCommunicative Englishの知識をTOEICテストの側面から学生に披瀝することができる。また、このセクションを利用してstudent-centered class activitiesを実践することもできるようにした。

▷ **評価の挙証データに幅**

評価は①『自習課題ノート』の提出を出席として出席を欠格条件とすること、②課題の取り組み方（作業に手抜きがある*、復習をしていない）で0.25回の欠席のペナルティをかけること、この2点が共通原則だが、これに加えて、③各課にある単語の学習を評価するためにVocabulary Checkのセクションを小テストにして評価することもできる（このセクションだけを担当者に電子媒体で配布可能）。また、④各課のミニテストを自習課題にして評価の対象にしてもよい。⑤練習問題（各課ごとのフルテスト）を翌週、全部あるいは一部、再練習して、その結果を評価の対象にしてもよい。いずれにしても、何らかの手段で評価方法は学生に明確に伝達していただきたい。

*Short Talk/Conversationの聞き取りはむずかしい。『自習課題ノート』にある（奇数ページ=右側ページ）の聞き取りながらのかつこ補充の作業はよくできていなくても無視して構わない。学習者には聞き取れないことに肯立ちを覚えなくて、何度も繰り返し聞くように指示してスクリプトなしのときに聞き取れなくても落胆しないこと、繰り返し聞けば必ず耳が慣れてくることを伝えていただきたい。ただし、復習でしっかり作業し直すことを力説していただきたい。

▷ **単語学習を強化**

TOEICテスト勉強になると、扱うべき単語の量が急激に増大する。就学動機や就学習慣のない学生は決してヴォキャブラリービルディングをしない。するためには、評価に組み込んだり、教科書の中で取り扱うしかないの、教科書本体と『自習課題ノート』の両方で、教科書で扱うTOEICテスト練習問題にある単語、決まり文句を学習するように配置した。もし、学生が真剣にこのヴォキャブラリーリストに取り組めば、教科書にある練習問題にも少しは親近感を持つことができ、問題にやや楽に取り組むことができよう。

▷ **アメリカ標準口語発音で頻繁に起こるリエゾンやリダクション**

学生の中には、つながる音や変化したりこわれたりする音がわからないので、聞き取りの学習がむずかしいと訴える。1分間に150語を発話するので、当然、liaisonやreduction (contraction), assimilationは起こってくる。その起こり方の傾向を教科書中で簡単に扱っている。学習者自身がすぐに再生できるようになることは出来ない、何度も聞いて口真似して学習できるように学習者用のCDに音源が入っている。

▷ **リスニングセクションの練習問題の音源を学生用CDにして配布**

学生が復習できるようにリスニングセクションの練習問題の音源の要求があった。と同時にとも、オリジナルのレコーディングはやや速過ぎるという指摘があった。速いのには慣れておけば本番のテストで緩やかに聞こえてゆとりさえ出うという見方もあったが、初期段階では1分150語程度の速さに抑えるため（と言っても初学者には速く聞こえることには変わらない）、新訂版では、新しい問題を全問改めて録音しなおしている。これを学生にも配布して、予習や復習に役立て、さらには将来、ポストTOEICとしてTOEICテストをさらに受験する場合、もう一度使えるようにした。繰り返し聞くことによって、聞き取れなかったところが少しずつ聞こえるようにする効果を狙った。

2. 授業で取り扱うこと

- ▷ 教科書は以下のとおりの構成となっている
- はじめに
 - 本書の使い方
 - Preliminary Lesson: Part 1: TOEICテストとは何か; Part 2: 1/5ミニテスト
 - Lesson One: PART Iの学習を中心にする
 - Lesson Two: PART IIの学習を中心にする
 - Lesson Three: PART IIIの学習を中心にする
 - Lesson Four: PART IVの学習を中心にする
 - Lesson Five: PART Vの学習を中心にする
 - Lesson Six: PART VIの学習を中心にする
 - Lesson Seven: PART VIIの学習を中心にする
 - Mock Test: 模擬テスト
- ▷ 各課は以下のとおりの構成になっている
- **Vocabulary Preview**: その課に出る単語や決まり文句をリストアップしたもの (TOEIC単語集とでも呼べるもの、総単語数は約2,200語)。単語に関する文法情報なども記載している。
 - **Vocabulary Check**: Vocabulary Previewの中から毎回16問 (15問正解を得れば満点にしてよい) の空所をその課に出る練習問題の単語で埋める。なお、ここに使われている文はその課で扱う練習問題に用いられている文をそのまま引用したものがほとんどである。
 - **Real English Sounds**: アメリカ標準口語英語の発音を、リエゾン・リダクションを中心に極めて簡単に扱う。イギリス英語との対比、リズムとイントネーションも配した。
 - **Coping with the Flow of Questions**: リスニングセクションのそれぞれのPART (I-IV) で時間の流れに従ってどう対処して行くか、受験のコツをフローチャートを示しながら述べている。
Controlling the Given Time: リーディングセクションのそれぞれのPART (V-VII) で時間の自己管理をしながらどう対処して行くか、受験のコツをフローチャートを示しながら述べている。
 - **More Tips**: それぞれのPARTに用いるシチュエーションの説明、そこで使われる特有な英語や英語らしい展開について述べながら、課によっては最後に、コツと英語の両面で注意しなければならないことを老婆心ながらもう一度まとめている
 - **Let's Try Together**: その課で扱うPARTの練習問題の例題を扱う。授業で担当者が説明したり、担当者と受講者が一緒になって、あるいは受講者がグループで解決できるように、解答のための考え方をヒントに挙げて次のセクション (Exercise) で扱うPARTのフルテストに備える。
 - **Exercise**: 各課で扱うPARTのフルテスト。全部やっても、半分は宿題にしてもよいところだが、リスニングの問題は全部であろうと半分であろうと余り時間の節約にはならない。どのPARTも全問でも10分を少し超える所要時間で済むからである。
 - **Mini-Test**: 各課で扱わない他のPARTから1/10の練習問題を扱う。これは、ある1つのPARTに集中して各課は進行するので、他のPARTSがなおざりにならないように配慮したもの。Lesson Oneから課が進むにつれて、問題解答のためのポイントはなくなっている。たとえば、PART Iを焦点にしたLesson OneではPART II以降の問題を出題しているが、コツと英語の両面に渡っては何も教室では扱わないので、その要点をポイントで説明している。この説明は課が進むごとになくなる。たとえば、Lesson Sevenにたどりつく頃には、学習者にはかなりPART VIIの問題の取り組み方はわかっているはずである。このセクションは宿題にしても構わない。
 - **Homework**: 『自習課題ノート』についての指示。担当者が上のいずれかのセクションを宿題にするなら、そのことも付して指示するところ。

▷ 本書に付随する教材

● 学習者用

- ✓ 教科書本体
- ✓ 自習課題ノート
- ✓ 自習課題ノートのスクリプトと解説集 (5週間分)
- ✓ *Grammar in a Nutshell* (TOEIC文法を大雑把にまとめたもの)
- ✓ CD 4枚

Disks 1-2 Exercise; Mini-Test; Real English Sounds

Disk 3 『自習課題ノート』Basic Sentences 300; Short Talks/Conversations 30 Disk 4

Vocabulary Preview

● 指導者用

- ✓ 教科書本体
- ✓ 自習課題ノート
- ✓ 自習課題ノートのスクリプトと解説集 (5週間分)
- ✓ *Grammar in a Nutshell* (TOEIC文法を大雑把にまとめたもの)
- ✓ CD-R 3枚

Disks 1-3 Vocabulary Check; Real English Sounds; Let's Try Together; Exercise; Mini-Test

- ✓ CD 4枚 (学習者用と同じ)

Disks 1-2 Exercise; Mini-Test; Real English Sounds

Disk 3 『自習課題ノート』Basic Sentences 300; Short Talks/Conversations 30 Disk 4

Vocabulary Preview

- ✓ 教授資料

- Preliminary Lessonは受講者各自が第1回目の授業までに各自でやっておく課である。この課のPart 2には1/5ミニテストがあって、TOEICテストの全貌を問題数各PART 1/5でやってみて体験する趣旨のものである。これは第1回目に提出する宿題として設定されている。そのように教科書にも指示されているので、このテストのANSWER SHEETの提出によって出席を確認されたい。それでも迂闊な受講者はいるので、次週まで提出を待ってもよい。初めからあまりきびしくするとTOEIC離れを起しかねないので、そこは担当者の裁量に任される。
- 『自習課題ノート』の答えがある5週間分の『スクリプトおよび解答集』は、教室では配布しない。配布するだけの時間の節約になると、2日に亘るこの授業は、前日に『スクリプトおよび解答集』を受け取った受講者が翌日の受講者に利用させていることが発覚したので、2日間の授業が終わった時点で場所を設定して受講者本人が取りに行くやり方に変える。このことは最初の授業で伝達していただきたい。しかし、ノートは当日か翌日までに所定の場所に返却していただきたい。

特色を挙げるとすれば、「パック化」を解消して、

1. 授業の中で担当者と受講者がインターアクションを展開できる機会が持てるようにしたこと
2. シラバスを始め、1クォーター7コマでこの教科書を完了できるように、担当者の裁量を、授業と評価の点から増大させたこと
3. はじめから練習問題の音源をCDで付けるなど、教科書の(ゆとりがあれば予習を含めて)復習の機会を増大させたこと
4. TOEICテストに必要な単語学習・発音練習を加えて、より基本的な受験勉強を授業と

自習（課題）とのタイアップで展開するようにしたことである。それだけに、担当者はパック化から解放されたが、自らTOEICテストへの対処の仕方を指導する創意工夫を迫られるようになった。また、学習者は以前にも増して高校時代までとは違った英語学習の新しいやり方に時間を割かなければならなくなった。

学習者の学習は授業と自習課題である。とりわけ、自習課題をするために『自習課題ノート』が充実した（負担が重くなった?）。2003年度とは異なり、単語学習を問題形式にして毎日試すことが要求されている。また、Short Talk/Conversationの聞き取りでは、「聞き取りのポイント」をヒントにスクリプトの一部に空所埋めをしながらその話題を聞き取り、その後に関条書きで「聞き取りのまとめ」を作成するように要求されている。こうした作業はすべて評価の対象となり、2004年3月27日の新訂版教科書のためのFD研修会のときに、2003年度英語部会長の高橋氏がそうした作業を取り込んだ形で統一した評価基準を提示した。

2.2.4 価格

新訂版には練習問題音源をCDにして付けるために、従来のやり方を採ると5枚以上の付録CDになりかねなかった。しかし、学習者の学習効率を優先させるとこの目論見は切り捨てるわけには行かなかった。スタジオ録音で英語だけでも8時間分のナレーションを収録した後での出版社との協議が何枚のCDに収めるかであった。それによって価格が大きく変わるのである。2003年8月の英語部会で新訂版の企画を披露したときに、同じように、クオターの授業に、高い価格の教科書は問題があるという指摘をされていた。TOEICテストの勉強をするなら、多角的、とりわけ聴力を鍛えることを抜きには「TOEIC準備」の期間の英語学習もコミュニケーションへの指向性の涵養にならないことを念頭に置いて、4000円を絶対に超えない教科書開発と出版社との価格交渉をすることを約束した。

苦労話というより愚痴になるが、著者になるといくつも精神的負担ができる。その中の一つがこの価格である。内容をどうするかで大きく変わる。しかし、最大の悩みはTOEICテスト予備授業にどれだけの責任が持てるかである。

編集経費を軽くするために、すべてのインプットとレイアウトを著者がした。教科書本体を除けば、著者が編集氏へ電送したファイルがそのまま印刷に用いられている。つまり、『自習課題ノート』、5冊のハンドアウト（『分冊』）、TOEICテスト基本文法の小冊子、「教授資料」はすべて著者の手元にあるオリジナル電子ファイルから印刷されたものである。

付録のCDも必要最小限に抑えて、あとは紙媒体の中に収めることで出版社とは合意した。その結果、教科書の定価は3500円（CD4枚＋5冊のハンドアウト（『分冊』）＋TOEICテスト基本文法の小冊子）となり、『自習課題ノート』も出版社はサービスに近い定価で前年のそれと同じ300円、新版教科書の合計価格は3800円である。成美堂もよく応じてくれたと言える。著者はいつも編集氏に「損をしては商売が成り立ちませんね。しかし、利はぎりぎり薄くしてください」と言うのが口癖だった。

結局は、使用者がどう使うかで価格が高い安いは決まる。授業にお付き合い、おぎなりの使用は高い教科書となるだろう。「プレTOEICテスト」で個々のレベルで高いスコアを目標にしてがんばり、「ポストTOEICテスト」のために復習をしながら再度、再再度……の利用をする使用者にとっては役に立てる教科書だと信じている。

3. さいごに

使い手のある教科書は子供の絵本に似ているだろう。子供は好きな (favorite) 絵本を多数持つわけではない。子供には詰んでしまうほどに、何度も読み聞かせを迫る、角は擦り切れ手垢がついた絵本が1冊あればよい。その1冊がその子供の一生の頭脳と情操を決定する。そういう絵本にめぐり合わない子供は、めぐり合って執着することの豊かさを知らないで一生を過ごすこともあるだろう。教科書といえども、そういう絵本のような物であって欲しいという願望がある。この教科書のオントロジーは、大欲張りだが、そのあたりにある。編集氏と作業を行いながら、著者はたくさんの要求を出した。レイアウトから一字一句にいたるまで、フォントのポイント選び、その種類の指定まで細かい要求をした。CDの録音のときも、納得が行くまで英語のネイティブと話し合いながら録音を進めた。なぜなら、著者自身が作るものに愛着を持てること、これがすべてを決め、一箇所でも緩みを作らない (実は、緩みだらけのものであるが)。でなければそこから瓦解する。この2点が開発の原点であった。

指導者にも学習者にもお役に立てるものであり、CDや自習課題ノートなどに、入学したてのころの青臭さと生真面目さが思い出として残れば、学習者も捨てたくはないだろう。しかし、このコミュニケーションを主体とした英語学習は、以後、一生、英語にかかわらないぞという学習者を作るかもしれない。その決意は悪くない。必須要件を満たせば英語とはまったくかけ離れたところで一家を成すこともできる。この教科書がそういう反面教師的性格を持つのなら立派に役目を果たしたと言える。

著者個人が自慢すべき教科書ではなく、統一教科書として著者を通して山口大学の総意ができるだけ反映した、その意味で自慢できる教科書開発が必要である。今後もう1年で、現在使っている『サーキットトレーニング』の改訂の必要がでてくるだろう。先行の『トータルトレーニング』に戻るか、それを現行の形に改変するか、指導者と学習者がコミュニケーションアプローチにコミットし実践すれば、いずれにしても総意が反映したヴァージョンを作ることができるだろう。そして、そのヴァージョンは少なくとも2種、できれば3種、手持ちにしておかなければならない。あとは、それを順次、年度毎に回し使いをやって構わない。個人的な一方への偏向もその時になるとかなり是正されているはずである。総意が反映しているのだから。そして、最重要点は、山口大学が英語を「使える」学生を生み出すことである。3月の終わりに韓国への出張があった。協定校の仁荷大学に行くと大勢の学生が現代のテクノロジーの粋を完備した新しい図書館で勉強していた。何を勉強しているのか覗くと多くが英語であった。それもTOEICテスト勉強である。“Excuse me for disturbing you, but could I talk to you for a while?”と尋ねたらためらうこともなく返事が英語で返ってきた。字にすると何でもない英語なのだが、静まった図書館の中では大声を出すことができない。蚊の鳴くような声での対話である。“Yes.” — “What’re you studying?” — “TOEIC.” — “What’s your goal score?” — “Over 900.” — “Wow, that high? Then what’s your score now?” — “830.” やはり、TOEICはコミュニケーションツールとして機能していた。視察のスケジュールが狂うと懇感を買いながら何人かの学生に話しかけた。視察をするときにはその大学の学生と話すのがいちばんわかるような気がする。4月に再訪したときに仁荷大学の寮の視察をした。たまたま1部屋4人の学生が揃っていた。英語で話しかけると全員が同じく、何の物怖じもなく楽しげに英語で語ってくれた。ピンポンをしていた学生もそうだった。ソウルの韓国外国語大学のキャンパスでも同じだった。詰まった日程での視察と交渉で疲れていたのもコーヒーを飲みながら一息つきたかった。歩いて

いる女子学生に近くのコffeeショップの場所を尋ねた。何気なく英語で尋ねても隠さない。ていねいに説明してくれたのですぐに見つかった。山口大学もTOEICテストをツールとして、これくらいなら英語でコミュニケーションは平然とやってのける学生がキャンパスを闊歩するようになったらと思う。これは夢ではない。英語、英語というのが、所詮、コミュニケーションである。「コミュニケーション」がたまたま言語を手段とし、それも特異的に英語というだけである。「英語コミュニケーション」というとき、「英語」にフォーカスを置かずに、「コミュニケーション」に置けば、コミュニケーションを抜きに人間生活は考えられない。であれば英語が嫌いも苦手も関係なくなるだろう。そうなれば、TOEIC700, 800はざらに見られるようになるだろう。その気負いをミッションとして2冊の教科書は持っている。

TOEIC[®] Newsletter No. 84 (IIBC, 2003)は山口大学を特集に組んで、TOEIC世代が世の中に出るときの期待で記事を結んでいる。山口大学でどこまで意識改革がなされ、見知らぬ異国の人間にも物怖じせずに、英語を使ってコミュニケーションがなされる日がくるのだろうか。その日が来れば、TOEICスコアなど捨ててしまえばよい。スコア400でも、500でも、980でも構わない。TOEICテストはツールなのである。ツールである限り実体がある。しかし、スコアは、英語を使ってコミュニケーションをしようという意思があるとき、初めて実体となる。それがなければ高かろうが低かろうが虚像でしかない。大阪商人風に言えば、「使ってナンボ」の世界である。そうした風向きを作るのも2冊の教科書のミッションである。今年3年目に入ったが、風は起こったか? Le vent se lève, il faut tenter de「風立ちぬ、いざ…めやも」…には何を入れたらよいか自明のことであろう。

新訂版の「はじめに」に書いたように、著者も教科書も成長するものである。『トータル』から『サーキット』へは成長の道程だったと言える。このことは出版社成美堂から無言のうちに教えてもらった。この仕事は筆者がずっと続けなければならない仕事だろうか? もし続けるという責務があるなら、教科書にミッションがある限り、もっと成長しなければならない。が、あの地獄の釜茹でのような作業はもうこれでおしまいにしたいという気持ちも強い。

(国際センター長・経済学部 教授)